

地域社会における国際交流 ——志摩スペイン村とその周辺——

村 瀬 由 紀 子

三重県磯部町の志摩スペイン村は、リゾート法を基に策定された「三重サンベルトゾーン」構想の主要プロジェクトであった。そのオープンに伴い、スペイン人エンターティナー約80人が隣町の阿児町に住むようになった。本論文では、磯部町と阿児町をフィールドに、スペイン人エンターティナーの居住をきっかけに、両町の交際交流にどのように変化が生じたのか、テーマパークで働く外国人は、地域社会でどのような生活を送っているのか、を明らかにした。磯部町では、スペイン村のオープンをきっかけに、スペインのバレンシア州スエカ市と姉妹提携を行い、行政が積極的にスペインとの交流を行っているが、地元の日本人とスペイン村のスペイン人との個人的な交流は

活発でない。逆に、阿児町では、行政によるスペインとの交流はほとんど行われぬものの、地元でしばしばパーティが開かれるなど個人的な交流が非常に活発である。また、スペイン人エンターティナーは、「エスパーニャタウン」に閉じこめることなく、積極的に日本を知ることに努め、地域住民との交流を図っている。始めは大勢のスペイン人とまどっていた町民も、そんな彼らの姿勢に好感を持ち、スペイン人は違和感なく地域社会に受け入れられるようになった。両町の住民にとって、スペイン人エンターティナーの来日は、国際交流という抽象的概念を具体的にただけでなく、地域を特徴づける新たなアイデンティティを付与する結果となったのではないだろうか。

東京ディズニーランドで子供が消えている？ ——TDL 児童誘拐の噂を追う——

林 英 里

1995年の暮れ頃から、東京ディズニーランド(TDL)を舞台にした児童誘拐未遂の噂が、子供を持つ主婦層を中心に広まり続けている。そこで、TDLには、独自の噂を生み出す空間的特徴があるのではないかという点を考えてみた。まず、一般の遊園地に伝わる噂と、TDLの噂を収集、比較してみたところ、TDLの噂には「隠されている事実を明らかにする」傾向があるという特徴が見受けられた。このような独特の形態の噂が生まれるには、やはりTDLの持つ空間的特徴が関わっているのではないかと。TDLは、施設の構造・運営のあらゆる面において、徹底した「現実の隠蔽」を行うことで、完璧な虚構空間を構築し、「世界で一番幸せな国」を実現しようとしている。これまでの噂研究の成果によれ

ば、本来与えられるべき現実的な情報が与えられない状況に置かれると、人々は一種の飢餓状態に陥るようである。つまり噂の発生を、情報の不足による空白を埋めるために生み出される「人々の心の中の事実」と考えるのである。TDLにおける噂発生のメカニズムにも、同様のことが言えるのではないだろうか。また、人々が「誘拐」に対して持つ共通認識を探るため、「サーカス団による誘拐」「だるま女の話」という2つの誘拐話と、TDL児童誘拐未遂の噂を比較してみた。すると、3つの噂はどれも「誘拐→身体的な変形→人間の商品化」というテーマに沿って語られている。しかし、TDLの噂は、結果的に誘拐が未遂に終わってしまうということで、前の2話とはまったく違った物語になっている。